

Title	魯迅と陳独秀：魯迅の陳独秀観と陳独秀の魯迅観
Sub Title	Lu Xun's attitude toward Chen Duxiu and Chen Duxin's attitude toward Lu Xun
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.34 (2005.) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20050001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

魯迅と陳独秀

——魯迅の陳独秀観と陳独秀の魯迅観——

長 堀 祐 造

0. はじめに

魯迅と陳独秀についてはすでに少なからぬ論文が書かれているが、ここではそれらをふまえつつ、トロツキー派に転じて以降の陳独秀に対する魯迅の陳独秀観と、同時期の陳独秀の魯迅観を中心に、新たな視点を提示してみたい。

1. 魯迅の陳独秀観

i 《魯迅全集》中の陳独秀

魯迅の日記、書信を含め、《魯迅全集》中の陳独秀に関する言及は20カ所を越える（本論末の付録資料参照）。本稿の趣旨から、ここでは基本的に1929年以後の文章についてのみ考察の対象とするが、トロツキー派問題と歴史的に関連すると思われる資料③については例外として簡単に論じたい。

- ③ 私の喊声が勇ましいか悲しいか、憎らしいかおかしいか、そんなことを顧みている余裕はない。しかし呐喊である以上、当然、主将の命令〔原文は「将令」——長堀注。以下〔 〕は長堀注を表す〕はきかねばならない、そこで私は、しばしばあえて筆を曲げた。「藥」の^{ユーアル}瑜児の墓には、いわれもなく花環を添えたし、「明日」でも^{スーサオズ}単^{シャン}四嫂子は息子の夢を見ぬままに終わったとは書かなかった。当時の主将が消極を好まなかったからである。

（『『呐喊』自序』。1922年12月3日執筆。学研版日本語訳『魯迅全集』第2巻14頁。下線は長堀が付した。以下、魯迅の文章の日本語訳は同版によるが一部改変したとこ

ろもある。魯迅のテキスト原文は本論末付録資料「〈魯迅全集〉に現れる陳独秀」参照)

トロツキー派問題が生ずる以前の1922年に執筆されたこの〈呐喊自序〉では、陳独秀の名は挙げられていないものの、「将」「主将」が明らかに陳独秀を指すことは疑いない。奇妙なことに、〈魯迅全集〉(人民文学出版社、1981年)はこの「将」「主将」の部分に注を施していない。あまりにも自明であるからか、あるいは五四運動の“主将”を陳独秀とする魯迅自身の言に編集者は触れなくなかったからか。おそらくその両方だったのだろう。陳独秀は、トロツキー派に転じて中共と対立して以降、五四運動の“主将”の座を降ろされ、代わりにその座につかされたのが、魯迅であった。毛沢東は一九四〇年に発表した〈新民主主義論〉で、五四運動と中国の新文化運動に触れるが、魯迅が「中国文化革命」の「主将」であるとしただけで、陳独秀の名は挙げていない¹⁾。中国の老トロツキー派はここに、歴史の偽造を見ている。魯迅はたしかに五四期を代表する作家ではあるが、五四運動の政治的、思想的主将は陳独秀であったというのが、老トロツキー派のみならず現在の歴史家の常識的見方であろう。新版の〈魯迅全集〉が近々中国で出版されるということであるから²⁾、その際にはぜひ「主将」が陳独秀を指すことを注記してほしいものである。

さて、本章の主題である、陳独秀がトロツキー派に転じて以降の、魯迅の陳独秀観を占う記述を見てみたい。執筆順に付録資料⑥、⑦、⑧、⑨の各編である。

- ⑥ これら〔『呐喊』の諸編〕は「奉命文学」ともいえよう。しかし、私が奉じたのは、そのころの革命の先駆者の命令であり、私自身よろこんで奉じたところの命令である。皇帝陛下の聖旨ではなかったし、金銭でもほんものの指揮刀でもなかった。
(『自選集』自序, 『南腔北調集』所収, 1932年12月14日執筆。学研版『魯迅全集』第6巻287頁)

ここでもやはり、陳独秀の名が直接は挙げられているわけではないが、「革命の先駆者(原文は「革命的前駆者」)」には陳独秀も当然含まれるというのが常識的な見方だろう³⁾。「〈呐喊自序〉同様、ここでも〈魯迅全集〉には注記はない。

- ⑦ だが、「新青年」の編集者が、くり返し足を運んでは催促し、催促が何回かに及んだので、私は一篇つくった。ここで、陳独秀先生を記念しなければならない。先生は私に小説を書けと力をこめて催促された一人であった。

(「私はどのようにして小説をかきはじめたか」,『南腔北調集』所収, 1933 年 3 月 5 日執筆。学研版『魯迅全集』第 6 卷 342 — 343 頁, 初出は 1933 年 6 月上海天馬書店刊の《創作的經驗》)

魯迅の書きぶりには陳独秀に対する深い思いがよく表れている。1933 年 3 月当時, 陳独秀は国民党に逮捕され, 南京で獄中生活をおくり, 審理中の身の上だった(1932 年 10 月に逮捕され, 1933 年 6 月国民党政府最高法院で有期徒刑八年の最終判決)。中共はこの陳独秀の逮捕にさいして, 冷淡な態度に終始したが, そのなかで, 魯迅が陳独秀の勧めで小説を書くことになったと回想している点は軽く見るわけにはいかない。またこの小論は天馬書店から出版された《創作的經驗》のために書かれたものだが, 天馬書店の創立者, 樓煒春は著名な作家, 詩人樓適夷^{いとこ}の堂弟であり, その実兄には中国トロツキー派に転じた樓国華(別名子春, 後に一丁の筆名で《魯迅: 其人, 其事, 及其時代》パリ第七大学東亜研究センター, 1979 年刊, という本を出版)がいた。魯迅が陳独秀の名をわざわざ挙げたのは, そのことによって陳独秀の救援活動にいくらかでも寄与しようという意図があったのではないか。当時, 生命の危険もあった陳独秀の身を案じてのことと読むのは深読みとまでは言えないだろう。

- ⑧ はじめて守常先生にお会いしたのは, 独秀先生によばれて, どのように「新青年」をすすめるかを相談する会合においてであった。これで知り合いになったわけである。(『『守常全集』題記』,『南腔北調集』所収, 1933 年 5 月 29 日執筆。学研版『魯迅全集』第 6 卷 354 頁)

ここから魯迅の陳独秀観を見て取るのは難しいが, 1927 年, 張作霖軍に処刑され, 共産党の烈士となった李大釗の全集の題記に陳独秀の名を刻むのを, 魯迅はまったく躊躇していないことは留意しておくべきであろう。

- ⑨ 彼〔劉半農〕が北京に来たのは, 恐らく「新青年」に投稿した後で, 蔡子民先生〔蔡元培のこと〕か, あるいは陳独秀先生が招いたからだろう。北京に来てから, 当然, 「新青年」の戦士になったことは言うまでもない。(中略)

「新青年」は各号の出るたびに, 編集会議を開いて, 次号の原稿の相談をした。そういう場合, 陳独秀と胡適之が, 最も私の注意を引いた。かりに戦略を一棟の倉庫に

見立ててみよう。独秀先生の場合は、表に大きな旗が一本立ててあり、「内に武器あり、注意せよ」と大書きしてある。ところが、扉は開きっぱなしで、内部に銃が何丁、刀が幾ふりあるか、一目瞭然、警戒は不必要である。適之先生の場合は、堅く扉を閉ざして、扉の所に小さな紙が貼ってあって、「内に武器なし、ご懸念なきことを乞う」と記してある。これは当然本当にしていいのだろうが、ある人々——少なくとも、私のような人——は場合によっては首をかしげて思案せざるを得ない。半農は、人に「武器庫」があることを思わせない一人であった。だから私は陳、胡には敬服したが、半農には親しみを感じた。

（『劉半農君の思い出』、『且介亭雜文』所収、1934年8月1日執筆。学研版『魯迅全集』第8巻86—87頁、初出は1934年10月、上海《青年界》月刊第6巻第3期）

ここでの魯迅は亡くなった劉半農を悼み、生前劉に抱いた親近感を強調している。陳独秀と胡適は劉との人柄の違いを際立たせるために引き合いに出されているのだが、胡適はいささか人が悪いような印象を与えるが、陳独秀の方は豪放磊落な性格がうまくとえられていて、悪い印象はないのではないか。

本題からそれるが、初出誌の《青年界》は「トロツキー派に答える手紙」問題のきっかけを作った陳其昌もよく執筆していた雑誌である。

さて、こうした資料から見て取れることは、魯迅は陳独秀がトロツキー派に転じての後、その政治的見解ゆえに陳独秀を軽視したり、従前の評価を変えたりしていないということである。この点、魯迅のスタンスは中共主流やスターリン主義からは離れていたと言うことができる。そこからはまた間接的に魯迅のトロツキー観も見て取れるのではないか。私は以前、魯迅のトロツキー観が晩年、やや否定的なものに転じていったことを論じたことがあるが⁴⁾、その否定の度合いは馮雪峰が書いた「トロツキー派に答える手紙」のようなスターリン主義の立場から、トロツキーやトロツキー派を「裏切り者」「スパイ」視するようなものではなかった。トロツキー派に転じた後の陳独秀に関する魯迅の書きぶりも、魯迅のトロツキー批判の程度に対応していると見て取ることができる。魯迅は1930年に、《芸苑朝華》全5巻という画集を編集し、そのうちの第5輯《新俄画選》に「託羅茲基〔トロツキー〕夫人像」を収録している。ロシア革命後の一時期、文化面の仕事に従事していたトロツキー夫人ナターリア・セドーヴァの姿を描写した版画である。トロツキーが前年の1929年にスターリンによって国外追放になったことは、魯迅はこの時、よく承知していたはずである。しかし、そのことは芸術的選択、評価において魯迅に否定的な影

響を及ぼさなかったのである。魯迅のトロツキー及びトロツキー派批判の度合いはせいぜいその程度のものだったのである。

ii 胡風の証言

さて、晩年の魯迅と親しかった胡風は、魯迅の陳独秀観をこう証言している。

……魯迅は「新青年」編集同人にして五四文学革命の指導者の一人、陳独秀に対して、終始一貫敬意のこもった態度を示しており、陳独秀の後の政治上の変化ゆえにその革命の功績を否定することではなく、彼の名に触れる時はいつも独秀先生あるいは独秀と呼んだ。このことは、功績は功績とし、誤りは誤りとし、どちらも隠し立てしない魯迅の戦闘道徳を示している。⁵⁾（「魯迅先生」、《新文学史料》1993年第1期8—9頁初出。後に出た単行本《胡風回憶錄》人民文学出版社、1993年11月刊には、この部分はない）

《魯迅全集》の記述およびこの胡風の証言から、魯迅の陳独秀観は、陳独秀の政治的立場の変遷にもかかわらず、晩年に到るまで一貫していたと考えることができるのである。「トロツキー派に答える手紙」が魯迅のものでないことがこのことから証明されるであろう。

2. 陳独秀の魯迅観

i 《陳独秀書信集》に見える魯迅

《陳独秀書信集》（水如編、新華出版社1987年内部発行）によれば、陳独秀が魯迅に直接触れる書信は四通ある。ここではまず、中国共産党成立以前の1920年、1921年にさかのぼって見ておく。

まず、1920年3月11日付の周啓明すなわち周作人宛書信である。

私たちは豫才先生〔魯迅〕が「新青年」のために小説をものして下さるよう切望しております、どうぞ先生からそうお伝え下さい。⁶⁾

これは魯迅が《狂人日記》などを発表した後のことではあるが、1933年に「私はどの

ようにして小説をかきはじめたか」で、「陳独秀先生を記念しなければならない。先生は私に小説を書けと力をこめて催促された一人であった」と魯迅が言っていることと照応している。

ついで、1920年8月22日付、同じく周啓明宛書信である。

魯迅兄の小説には、実際五体投地で敬服しています。⁷⁾

陳独秀は《新青年》第8巻第1号（1920年9月）に載ることになる魯迅の短編「風波」の原稿を読んで絶賛しているのである。

1920年9月28日付周啓明宛書信は、《新青年》の随感録に魯迅、周作人の執筆を勧め、さらに魯迅に小説集の出版を促している。これが魯迅の第一創作集《呐喊》の出版に結実していくことになるのである。

随感録は本来とても生气溢れるものだが、今は私一人が独占しています。これはよくない。私はあなたと豫才先生、玄同〔錢玄同のこと〕とが時間があれば書いてくれることを希望します。豫才兄の書いた小説は実際集めて出版する価値があります。もし、豫才兄にあなたから尋ねてみて、そう思うということなら、「新潮」「新青年」「魯迅小説の初出誌」から切り抜いて加筆の上、印刷のために送って下さい。⁸⁾

最後は1921年2月15日付の豫才（魯迅）・啓明（周作人）宛の書信。《新青年》が上海で印刷中、フランス租界の警察に差し押さえられた際、原稿の書き手がいなくなったので、二人に原稿執筆を依頼する手紙であった。

豫才、啓明両先生：「新青年」の異変はきっともうご存じだろうと思います。今は、広東に移して出版する以外方法はありません。北京の同人で文章を書いてくれそうな人はいませんのでお二人にお願いするほかないのです。どうでしょうか？ お返事をお待ちします。⁹⁾

すべて1920年と1921年の手紙であるが、この時期の陳独秀の魯迅に対する高い評価は一目瞭然であろう。さて、こうした陳独秀の魯迅評価は陳独秀が中共を追われ、中国トロツキー派の指導者となり、魯迅が共産党系文化人の象徴となっていく1930年代、どのよ

うに変わっていくのだろうか。

ii 濮清泉が語る陳独秀の魯迅評価

陳独秀の老表で、トロツキストとしてともに南京で獄中生活を経験した濮清泉（1905—1997）は「私の知る陳独秀」¹⁰⁾のなかで、陳独秀の魯迅に対する評をこう記している。

魯迅について言えば、陳独秀はこう言っていた。「まず魯迅が中国現代作家の中で第一の人物であることを承認しなければならない。魯迅の中短編小説は内容、形式、構造、表現みな非常に優れており、他の作家よりはるかに深みがあって、それゆえ重みも全然違う。しかし、私の浅薄な見方だが、世界の一流作家や中国の古典作家と比べると、いささか距離があるように思える。「新青年」では魯迅は闘将の一人だったが主将ではなかった。私たちは彼や二弟建人〔作人の誤り、建人は三弟〕の寄稿を歓迎したが歴史的 facts はこのようなものだ。（中略）ともあれ、私は魯迅にかなり敬服していた。私は魯迅を畏友と考えていた。魯迅の筆鋒は鋭く、深みがあり、私には恥ずかしながら及ばない。人は魯迅の短文は匕首のようだというが、私は大刀にも勝ると言おう。魯迅は晩年、文学を放棄し、政治論に従ったが、これは損失と言うほかない。私は魯迅が偉大な作品を世に問うことを期待しているし、この願いがむなしく終わることのないよう希望している」と。¹¹⁾

陳独秀がこれを語った時期は明確ではないが、1932年10月から1937年8月まで続いた南京での獄中生活期のことと考えられ、一部は魯迅生前に語られたものと考えて良さそうではある。さて濮清泉のこの文章は時系列・話法にわかりにくい点があり、また誤解、誤りが文章全体を通じて多いことを、鄭超麟¹²⁾や、朱文華¹³⁾が指摘している。陳独秀の政治方面、プライバシー方面にまで及ぶ濮清泉のこの回想の言を全面的に信じるわけにはいかないのだが、こと魯迅評に限っては、鄭超麟の反論もなく、概ね信頼できそうに思われるのである。

iii 「トロツキー派に答える手紙」をめぐって

さて、陳独秀の肯定的な魯迅観を揺るがす事態が発生する。1936年7月、有名な「トロツキー派に答える手紙」が発表されたのである。これは今日では馮雪峰の作品であり、厳密には魯迅のものとは言えないことがわかっているが¹⁴⁾ 当時は発表名義人魯迅の作と

考えられていた。きっかけの手紙を魯迅に送った中国トロツキー派のメンバー陳其昌も、また陳独秀や他のトロツキー派メンバーも魯迅の書いたものと考えていた。中国トロツキー派は日本から金をもらっていると暗に仄めかしたこの手紙に陳独秀は大いに怒る。その時の陳独秀の反応を二人の老トロツキー派はこう紹介している。

其昌がこの事件を引き起こしたとき、私は香港にいた。其昌は事前にこのことを他の同志と相談しなかったので、事後、同志たちの厳しい叱責を受けた。とりわけ、南京の獄中にいた陳独秀はこれを知って、大いに怒り、なぜ魯迅に幻想を持つのかと我々に問うた。独秀は魯迅の共産党に対する関係は呉稚暉の国民党に対するのと変わらず、持ち上げられて恩に感じ、それに報いようとするのであり、利害を超えた是非の心などもうなくなったのだ、と言った。其昌は北京大学時代から魯迅を熱烈に崇拝し、その気骨を尊敬していたために幻想が生まれ、そのため魯迅の中傷に満ちた返信を見て、ひどく傷ついた。(王凡西著《双山回憶錄》香港士林圖書公司, 1994年増訂本238頁)¹⁵⁾

さらに楼国华（一丁）はこう書く。

陳仲山〔陳其昌〕が魯迅に書いた第二信には返事はなく、当然発表もされなかった。トロツキー派指導者陳独秀は当時まだ南京監獄にあり、これを聞いて雷を落とした。魯迅の共産党に対する関係は呉稚暉の国民党に対する関係と同じだ、と。独秀は手紙の中で魯迅を「紅い老いぼれ」とさえ呼んだ。陳独秀の言葉は感情的な要素もあるかも知れない。私は常々、魯迅は当時の共産党の国民党に対する投降政策に極力反対していると思っていた。魯迅は政治上あるいは理論上から反対していたのではなく、その一生の経験から反対していた……。¹⁶⁾

(一丁著《魯迅：其人，其事及其時代》パリ第七大学東亜出版センター，1979年刊249頁)

ついでに他のトロツキストの反応も見ておけば、鄭超麟は半世紀以上も経た1993年に、こう回想している。

もちろん私にはその手紙がどういうことを意味するのかわかった。当然ながら私は陳仲山が魯迅に手紙を書いたり、出版物を送ることには反対だったが、魯迅のこの返

信にはことさら反感を覚えた。魯迅はかつて「悪罵と恫喝は戦闘ではない」[『南腔北調』収録の短文]と語ったではないか？ 魯迅は国民党の御用新聞にしばしば出てくる「ループル学説[中国の進歩派がソ連からループルをもらっているという反動派の中傷攻撃のこと]」に一貫して反対していたのではないか？ なのにどうして自分では「日本円学説」を持ち出して人を罵倒するのか？ 何か証拠でもあるのか？ (中略)

この手紙のため、私の心の中で魯迅の株は下がった。私はこう思った。中国の文人はより強大な敵に対する時の論調と、より弱小な敵に対する時のそれとを使い分けるものだから、魯迅に厳しく当たりすぎることもない、と。

出獄後、私は陳其昌同志がこの手紙を魯迅に書いたとき、他の同志たちはみな反対したことを知った。また何人かの同志は魯迅に対してことさら反感を抱いていることもわかったので、私はこれら同志たちにそんなに反感を持つこともないと忠告したことがあった。

(「読胡風長文『魯迅先生』有感(胡風の長文「魯迅先生」を読んでの感想)」「魯迅研究月刊」1993年第10期)¹⁷⁾

また、トロツキー派の理論機関誌<火花>(1936年9月25日)と政治機関誌<闘争>(同年10月1日)は次のような声明を載せた。トロツキスト一般の「トロツキー派に答える手紙」に対する当時の心情を反映したものと見ていいだろう。なお、執筆者について、私が王凡西に直接確かめたところでは、王凡西その人であるとのことだった。

緊急声明

スターリン党のフロント雑誌「現実文学」第一期誌上で、魯迅の「トロツキー派に答える手紙」を読み我々は驚きに堪えない。すべての革命的読者にことの真相を明らかに是非をはっきりさせるべく、ここに以下のごとく声明するものである。

一、中国共産主義同盟(すなわち魯迅が言うところのトロツキー派)は魯迅に対しいかなる書信も書いたことはない。魯迅のような権威におもねり、真の革命家精神を欠き、いたずらに謾罵を尊んで政治常識をまったく持たぬ者に、書信を送るはずなどもとよりないのである。

二、今回、陳××が魯迅に書信を送ったのは、全面的に陳個人の書信であり、その中で政治問題が言及されようとはわが組織とは関係はなく、ましてやわが組織を代表した発言でもない。

三、魯迅は個人的な往復書簡になんと「某派に答える」という大仰なタイトルを付け、わが組織全体をほしいままに中傷しているばかりか、トロツキー同志の名誉と人格まで傷つけている。このことに関して、貴重な時間と精力を割いて魯迅と無益な論争をすることを我々は潔しとしない。我々はただすべてのプロレタリア戦士と革命家に、スターリン党が全世界の階級的敵と連合して我々に対し、とりわけトロツキー同志に対して行っている恥知らずな中傷という事実について抗議に立ち上がることを訴えるのみである。なぜなら、魯迅の中傷はこの汚れた濁流のか細い一支流にすぎないからである。

中国共産主義同盟（ボルシェヴィキ・レーニン派）¹⁸⁾

陳独秀の反応も当時の他のトロツキスト同志たちの反応とそう変わらないものだったことがわかる。トロツキー派が受けた政治的打撃の大きさがこうした反応から容易に見取れるのである。この手紙は実に巧妙なスターリン主義的デマ宣伝文の典型である。つまり、中国トロツキー派が日本から金をもらっているとは直接は書いていないのだが、事情をよく知らない人々がこれを読めば、トロツキー派は日本から金をもらっていると信じてしまうような書きぶりなのである。馮雪峰はスターリン主義の宣伝家としては中々のものだったと言える。トロツキー派の切齒扼腕ぶりは想像に難くない。

しかしながら、馮雪峰の文章「1936年の周揚らの行動及び魯迅の『民族革命戦争の大衆文学』というスローガン提出の経過（有关一九三六年周扬等人的行动以及鲁迅提出《民族革命战争的大众文学》口号的经过）」が《新文学史料》1979年第2輯に（老トロツキストたちは当初この文章の存在を知らず、この時はまだことの真相に気づかなかったと、王凡西は私宛の書信では語っている）、さらには1993年、胡風の《魯迅先生》（前掲）が同じく《新文学史料》に掲載され、この手紙が魯迅の書いたものではないことがはっきりすると、王凡西は「胡風遺著読後感」の中でこう書き直した。

この段の回想「陳独秀の上述の魯迅批判の言葉」は国内の一部党史研究者の反響を引き起こした。陳独秀は平静な態度で魯迅に対することができなかったと彼らは考えたのである。しかし、そのような表面上客観的でいわゆる公平な論とは実は決して公平ではない。当時、陳独秀はまさしくトロツキストとして蒋介石の監獄にあり、突然かつての同僚にして旧友「魯迅」が、むやみやたらと堪えがたい罪状を、陳独秀を指導者とするトロツキー派同志にかけてきたのである。性、烈火のごときこの革命家が

どうしてこみ上げてくる激しい怒りを抑えることができたであろうか？「顔に唾されても乾くのを待つ〔忍耐強いことのたとえ〕』というのは誰であれ、革命家の品格ではないが、ましてや陳独秀という革命家のそれではなかった。

残念なことに、陳独秀は生前、胡風のこの証言を見ることはなかった。そうでなければ、独秀は現在の私たち同様、きっと「白いおいぼれ」という呉稚暉を罵る言葉で魯迅をなぞらえた怒りの語を撤回することだろう。

とはいうものの、陳独秀の魯迅に対する全体的な評価は終始一貫この中傷によって変わることはなかったのである。1937年12月、独秀が書いた「私の魯迅認識」の本文中に以下のような言葉がある。

「民国十六、七年ごろ、魯迅はまだ政党〔共産党を指す〕に接近しておらず、党内の無知な輩は、魯迅は一文の価値もないと罵った。当時私は魯迅のために大いに不平を抱いた。その後、魯迅が政党に接近すると、かの無知蒙昧な輩は、突然魯迅を天上にまで持ち上げた。まるで魯迅先生が以前は犬だったが、今は神とでもいうように……」

これは非常に公平な評価である。しかし、魯迅自身は陳独秀に対して終始、公平な態度を持ち続けた。それは、他のことはさておき、陳独秀がすでに党内で失脚していた時期、魯迅が陳独秀の名を挙げて、いかにして小説を書き始めたのかを書いた際、まったく隠すことなくその功を独秀に帰したことを指摘するだけで十分だろう。

(香港《十月評論》1994年第1期)¹⁹⁾

鄭超麟も前掲の文章の最後でこう述べている。

胡風は死してなお、その著作によって五十数年来の歴史的案件を解決しえたのである。なんとまあ、トロツキー派が漢奸だと示唆する言葉は魯迅自身の考えではなかったのだ。魯迅がもし熟考していたなら、馮雪峰が代筆した、魯迅自身の原則に反する仄めかしの言葉に同意していたかどうか。私たちには依然証拠はない。

胡風のこの「魯迅先生」という長文を読んで、私の中の魯迅像はにわかに大きくなり始め、国民党の獄中でこの有名な手紙を読む以前の魯迅像が戻ってきた。

馮雪峰は胡風に言った。「魯迅はまだまだだな、ゴリキーには及ばないよ。ゴリキーの政論はみんな党が送り込んだ秘書が書いたもので、ゴリキーは署名するだけなんだ」と。胡風はこれを聞いて「いささか意外に感じた」と言っている。思うに、

馮雪峰のこの言葉は魯迅を貶めるものではなく、逆に私の心の中で魯迅は株を上げ、わが中国のゴリキーは畢竟ロシアのゴリキーよりも上だと言うことがわかった。わずかに残っている私の愛国主義はこのことを誇りとするものだ。

(《魯迅研究月刊》1993年第10期)²⁰⁾

楼国華も含め、みな魯迅がスターリン主義の陥穽から救出されたことを喜んでいるのである。

さて、最後に王凡西が、陳独秀の正確な魯迅観を表していると言う陳独秀の「私の魯迅認識（我对于鲁迅之认识）」について見ておきたい。

iv 陳独秀著「私の魯迅認識」

世の中で、魯迅先生ほど毀誉褒貶が激しい人はいない。

魯迅先生とその弟の啓明先生はともに「新青年」の書き手だった。最重要の書き手ではなかったが、発表した文章は少なくない。とりわけ啓明先生は多かった。しかし、このお二人は自己の独立した思想を持っていた。「新青年」の書き手の誰かに付和雷同して参加したがために彼らの作品が「新青年」の中で特別な価値があったわけではない。これは私の私見であるが。

魯迅先生の短編ユーモア作品は中国空前の天才的創造であり、思想も進歩的だった。民国十六、七年ごろ、魯迅はまだ政党に接近しておらず、党内の無知な輩は、魯迅は一文の価値もないと罵った。当時私は魯迅のために大いに不平を抱いた。その後、魯迅が政党に接近すると、かの無知蒙昧な輩は、突然魯迅を天上にまで持ち上げた。まるで魯迅先生が以前は犬だったのが、今は神とでもいうように。しかし私は、本当の魯迅は神ではなく、また犬でもなく、一人の文学的天才をもった人だと思う。

そして最後には、いく人かの誠実な人たちが、おおむね信頼するに足る魯迅の消息を私にちょっと教えてくれた。魯迅は接近した政党の統一戦線政策に全面的に反対というわけではなく、彼が反対していたのは、土豪、劣紳、政客、悪徳商人との丸ごとの連合であった。これがために魯迅は恨みを抱いて亡くなったのだ、と。現在全国の軍人が血戦の中にあるとき、なんと上海の商人が敵を助けて、食料を提供し、大量の日本製品を秘密裏に売りさばき、それで救国公債を引き受けるという怪現象があるという。このことから見ても魯迅先生の意見はまったく理由がなかったわけではないの

だ！ この点において、この老文学家は最後までいかほどの独立思考の精神を持っていたのであり、いい加減に付和雷同することを肯んじ得なかったのだ。これは私たちが敬服すべきところである。²¹⁾

これは1937年11月21日付の《宇宙風》散文十日刊第52期に発表された短文である。陳独秀が南京の獄から出たのは同年8月23日のこと。発表時には陳独秀は武漢にいた。おそらく、魯迅逝去一周年に思うところがあって書いたのだろう（魯迅の逝去は1936年10月19日）。

陳独秀がここで言う政党とはもちろん共産党のことである。陳独秀はまだ共産党の指導者だったころ、党内の無知な者たち（創造社、太陽社などの文学者をいうのであろう）が魯迅をけなすのに大いに不満を抱き、その後、陳独秀が党を追われる前後から魯迅が共産党系文化人の象徴的存在となって以降（陳独秀が党を除名されるのと入れ違いに魯迅は左連に参加しているわけだ）、党内の無知な輩が魯迅を神格化し始めたことを批判している。陳独秀は一貫して、最初期からその死まで、魯迅を優れた文学者として評価してきたことを自負する一方、神格化には反対している。また、中共やコミンテルンの統一戦線政策に疑問を提起した魯迅を、陳独秀は自前で思考しうる独立した思想と精神とを持ち合わせた文学者として高く評価しているのである。

ちょうど同じ頃毛沢東は魯迅の逝去一周年に際し、陝北公学で有名な「魯迅論」²²⁾の講演を行っている。陳独秀がこれを知っていたかどうかかわからないが、毛沢東のこの魯迅論は文革期まで続く、魯迅の神格化に本格的な道筋をつけたものであった。毛沢東は死せる魯迅を神格化し、記号化して、政治的に利用しつくしたのであった。魯迅の遺児周海嬰の著によれば、毛沢東は魯迅が人民中国成立後まで生きていたら、沈黙するか、獄中で書いているかのどちらかだと語ったことがあるということだが²³⁾、毛沢東の高い魯迅評価は、ある意味で便宜的側面があることを否定しきれない一方、陳独秀の魯迅評価は極めて正統的なそして心からのものであることはその1920年代初めの手紙からも裏付けられるだろう。

ともあれ、この文章には理性的な陳独秀がいる。「トロツキー派に答える手紙」に対し、烈火のごとく怒った陳独秀ではあったが、王凡西のいうとおり、陳独秀の本当の魯迅評価は理性的に書かれたこの短文に見るべきである。1937年当時、「トロツキー派に答える手紙」は一般には相変わらず魯迅の作と考えられていたことを考慮すれば、陳独秀の度量はさすがであると言わざるを得ない。そして、魯迅神格化の悲劇を予見していたその眼力も

優れたマルクス主義者のそれということができよう。

さて、結論を述べる段となった。

魯迅の陳独秀観は陳独秀がトロツキー派に転じて以降も一貫して変わらなかった。それは魯迅のトロツキー観とも関連していると考えべきある。魯迅のトロツキー観も実は肯定から全面否定に変わったのではなく、部分的な否定に止ったのである。全面否定の印象を世間にもたらした「トロツキー派に答える手紙」は実は魯迅の作ではなかったのだ。魯迅のトロツキー批判の度合いがその程度だったからこそ、陳独秀がトロツキー派に転じても魯迅は陳独秀を否定的に語ることはなく、ましてや人格的な否定には行き着かなかったのである。

また陳独秀の魯迅観も、最初期からの優れた文学者としての魯迅という評価は一貫していた。魯迅が、陳独秀自身の共産党除名と入れ違いに、党の文化的象徴となっていったにも関わらず、陳独秀は等身大の魯迅を愛し、評価していたのである。ほんの一時期、「トロツキー派に答える手紙」を読んだ陳独秀は激情に駆られ魯迅を罵ったりしたのだが、魯迅の「政治的限界」（「トロツキー派に答える手紙」が魯迅の作ではない以上、「限界」ではなかったと言えるが）を受容し、最終的には従前の魯迅評価を保ち続けたのであった。等身大の魯迅という視点は今までこそ当たり前のように聞こえるが、新中国の歴史において、それはいまだ新しい視点であり、熟しているとは言えない。近年の魯迅バッシング²⁴⁾は陳独秀言うところの、かつての党内の無知な輩と同次元の、単なる神格化に対する反発か魯迅批判に名を借りた共産党批判にすぎない要素が大と見受けられる。等身大の魯迅研究はなおこれからの課題なのかも知れない。その意味で、陳独秀の魯迅評価は少なくとも中国においてはいまだに意義を有するものと言えるのみならず、魯迅を愛するすべての者たちが共有すべき遺産とすることができるのではないか。

付記

本稿は2002年5月27日－29日、中国南京市南京大学で開催された第7回全国陳独秀學術研討会での中国語の発表原稿をもとに若干の改訂を加えたものである。なお、同研討会当日、南京大学の包忠文・包進両氏の共著論文《同一的战阵中的战友》を収録した奚金芳主编《纪念陈独秀先生逝世60周年论文集》（南京會議籌備處編印，2002年5月）が配布された。この論文冒頭部は本稿と重なる部分があるが、互いに独立の論文である。

注

- 1) 《毛泽东选集》第二版第2卷（人民出版社，1991年，698頁）。
- 2) 《文汇报书周报》2002年3月8日付報道。
- 3) たとえば朱文华著《终身的反对派——陈独秀评传》（青岛出版社1997年），97頁参照。
- 4) 「魯迅におけるトロツキー觀の転回試論——魯迅と瞿秋白——」1987年12月，「中国文学研究」第13期（早稻田大学中国文学会刊）。のちに《试论鲁迅托洛茨基观的转变——鲁迅与瞿秋白——》（王士花訳）として《魯迅研究月刊》1996年第3期に掲載。
- 5) 原文は以下の通り。
 “……他对《新青年》编辑同人、五四文学革命领导者之一的陈独秀，始终表示敬重的态度，并不因陈独秀后来政治上的变化而否认他的革命功绩，提到他名字时总称为独秀先生或独秀。这表示了他的有功论功、有过论过、不能彼此互掩的战斗道德。”
- 6) 原文は“我们很盼望豫才先生为《新青年》创作小说，请先生告诉他。”
- 7) 原文は“鲁迅兄做的小说，我实在五体投地的佩服。”
- 8) 原文は以下の通り。
 “随感录本是一个很有生气的东西，现在为我一个人独占了，好不好，我希望你和豫才玄同二位有功夫都写点来。豫才兄做的小说实在有集拢来重印的价值，请你问他倘若以为然，可就《新潮》，《新青年》剪下自加订正，寄来付印。”
- 9) 原文は“豫才・启明二先生：《新青年》风波想必先生已经知道了，此时除移粤出版无他法，北京同人料无人肯做文章了，唯有求助于你两位，如何，乞赐复。”
- 10) 初出は“我所知道的陈独秀”（《文史资料选辑》第71集，中华书局1980年）。ここでは中国文史出版社版《文史資料选辑》合订本第24冊（总69—71），1986年，69—70頁による。
- 11) 原文は以下の通り。
 “谈到鲁迅，陈独秀说，首先必须承认，他在中国现代作家中，是首屈一指的人物。他的中短篇小说，无论在内容、形式、结构、表达各方面，都超上乘，比其他作家要深刻得多，因而也沉重得多。不过，就我浅薄的看法，比起世界第一流作家和中国古典作家来，似觉还有一段距离。《新青年》上，他是一名战将，但不是主将，我们欢迎他写稿，也欢迎他的二弟周建人写稿，历史事实，就是如此。（中略）总之，我对鲁迅是相当钦佩的，我认他为畏友，他的文字之锋利、深刻，我是自愧不及的。人们说他的短文似匕首，我说他的文章胜大刀。他晚年放弃文学，从事政论，不能说不是一个损失，我是期待他有伟大作品问世的，我希望我这个期待不会落空。”
- 12) 《讀濮清泉〈我所知道的陳獨秀〉隨記》《史事與回憶——鄭超麟晚年文選——》第3卷（香港天地圖書有限公司，1998年）所収参照。
- 13) 前掲注3書参照。
- 14) 拙稿『「トロツキー派に答える手紙」をめぐる諸問題』（正・続）、『日本中国学会創立50年記念論文集』（汲古書院1998年10月），及び『蘆田孝昭教授退休記念論文集』（東方書店1998年12月）所載参照。
- 15) 同書初版は香港周紀行出版社，1977年刊。邦訳『中国トロツキスト回想録』は矢吹晋訳，柘植書房1979年刊。この部分は拙訳による。また，当該部分原文は以下の通り。但し，ここでは簡体字に直して掲げる。

“其昌做这件事时我在香港，事前他也没有和其他同志商量，故事后颇受同志们的指责，尤其是

南京监狱中的陈独秀，知道了大发脾气，问我们为什么会对鲁迅发生幻想。他认为，鲁迅之于共产党，无异吴稚晖之于国民党，受捧之余，感恩图报，决不能再有不计利害的是非心了。其昌从北平起就热烈崇拜鲁迅，很敬重他的骨气，幻想发生，即由于此。看到鲁迅那封满纸诬陷的复信后，很觉得痛苦。”

- 16) 原文は以下の通り。但し、ここでは簡体字で掲げる。

“陈仲山给鲁迅的第二封信，没有得到答复，自然也没有发表。托派的领导人陈独秀当时尚在国民党的南京狱中，他知道了这事大发雷霆，他认为鲁迅之对于共产党，无异吴稚晖之对于国民党，我记得他在信上甚至用了‘红色老狗’字样。陈独秀的话也许有感情用事的成分，我总觉得鲁迅对于当时共产党对国民党的投降政策，是反对甚力的，他不从政治上或理论上反对，而从他一生的经验上反对，……”

- 17) 拙訳は「トロツキー研究」No.13, 1994 年秋号所載。この部分原文は以下の通り。

“我当然明白这是怎么回事。我当然不赞成陈仲山写信并寄出版物给鲁迅，但对于鲁迅这封答信，特别反感。鲁迅不是说过，‘辱骂和恐吓决不是战斗’的话么？他不是一向反对国民党御用报刊上常常出现的‘卢布说’么？他为什么自己用‘日圆说’来辱骂人呢？他有什么证据呢？（中略）

鲁迅这封答信贬低了他在我心目中以前的地位。我想，中国文人对于更强大的敌人用的是一种论调，对于更弱小的敌人用的又是另一种论调，由此不必过于苛求鲁迅。

我出狱后，知道陈其昌同志写这封致鲁迅信时，别的同志都不赞成。我又知道有些同志对于鲁迅特别反感，我曾劝告这些同志不必如此。”

- 18) <闘争> 1936 年 10 月 1 日付。ここではアムステルダム国際社会史研究所 (IISG) 所蔵のオリジナルによる。当該部分の原文は以下の通り。但し、ここでは横書き簡体字に直して掲げる。なお、<火花>のテキストは<鲁迅研究資料> 8 (天津人民出版社, 1981 年刊) で見られる。

“紧要声明 (二)

在史大林党的外围刊物：现实文学的第一期上，我们看到了鲁迅<答中国托洛斯基派的信>，不胜骇异，为使一切革命的读者明解真相及判别是非起见，兹声明如下：

一，中国共产主义同盟（即鲁迅所说的<托洛斯基派>）从未给鲁迅写过什么信；同时对于像鲁迅那样阿谀权威，缺乏真正革命者精神；徒尚谰骂而绝无政治常识的人，根本也不会给他写信。

二，此次陈××之致书鲁迅，完全是他私人的函件，其中虽然也涉及政治问题；但完全与本组织无关，更不是代表本组织发言。

三，鲁迅将私人函件的往还竟标以<答某某派>的大题而肆意诬蔑，他不仅诬蔑本组织的全体，且毁谤到托洛斯基同志的名誉与人格。对于这，我们不屑拿宝贵的时间与精力来和鲁迅作无益的争辩；我们只号召一切无产阶级的战士与全体革命者，起来抗议史大林党联合了全世界的阶级敌人向我们，尤其是向托洛斯基同志施行无耻的诬蔑这一事实，因为鲁迅的诬蔑，只是这一恶浊的洪流之一脉细支罢了。

中国共产主义同盟（布尔塞维克—列宁派）”

- 19) 原文は以下の通り。ここでは簡体字に直して掲げる。陳独秀の引用部分是一部異同がある。注

21) 参照。

“这段回忆曾经引起国内一些党史研究者的反应。他们认为陈独秀不能以公平冷静的态度来对待鲁迅。其实，这种表面客观的所谓持平之论，倒是绝不公平的。当时陈独秀正以托派身分被蒋介石关在监狱里，突然间看到他的一位旧同事与老朋友，竟将最不堪的罪状横加在以他为首的那一派同

志们身上,怎能使这位性似烈火的革命者按捺住心头怒火呢?‘唾面自干’不是任何革命者的品格,更不是陈独秀这位革命者的品格。

可惜,陈独秀未能生前见到胡风的这一项证言:不然的话,他一定会像现在的我们一样,会撤回他将鲁迅比之以“白色老狗”吴稚晖的愤慨语。

虽然如此,陈独秀对鲁迅的整个评价,始终不曾因此诬陷而有所改变。一九三七年十二月,在他写的《我对鲁迅之认识》一文中,我们见到了如下的话:

“在民国十六七年,他还没有接近政党以前,党中一些无知妄人,把他骂得一文不值,那时我曾为他大抱不平。后来,他接近了政党,同时那一班无知妄人,忽然把他抬到三十三层天以上,仿佛鲁迅先生从前是一只狗后来是一个神……。”

这是非常公正与持平的评价。其实鲁迅本人对陈独秀的态度也始终公正与持平的。别的不说,只要指出陈独秀已经在党内失势,当鲁迅提到他如何写起小说来的时候,却毫不掩饰地归功于陈独秀的鼓励。”

20) 原文は以下の通り。

“胡风死后还能以他的著作解决了五十多年以来的历史公案。原来,暗示托派为汉奸的话,并非鲁迅自己的意思。鲁迅如经过深思熟虑的话,是否可以同意冯雪峰代拟的那些违反鲁迅自己原则的暗示的话呢? 我们还没有证据。

读了胡风这篇《鲁迅先生》长文,顿使鲁迅在我心目中的形象高大起来,回到了我在国民党监狱中看到这封有名的信以前的地位。

冯雪峰告诉胡风说:‘鲁迅还是不行,不如高尔基;高尔基那些政论,都是党派给他的秘书写的,他只是签一个名。’胡风说。他听后感到‘有点意外’。我则认为冯雪峰这些话不是贬低鲁迅,而是在我心中提高了鲁迅的地位,知道了我们中国的高尔基毕竟高出于俄国的高尔基。我的残余的爱国主义将会引此以自豪的。”

21) 本編初出は《宇宙風》第52期。ここでは《陳独秀著作選》第3巻,上海人民出版社,1993年刊,430頁による。原文は以下の通り。

“世之毁誉过当者,莫如对于鲁迅先生。鲁迅先生和他的弟弟启明先生,都是《新青年》作者之一人,虽然不是最主要的作者,发表的文字也很不少,尤其是启明先生;然而他们两位,都有他们自己独立的思想,不是因为附和《新青年》作者中那一个人而参加的所以他们的作品在《新青年》中特别有价值,这是我个人的私见。

鲁迅先生的短篇幽默文章,在中国有空前的天才,思想也是前进的。在民国十六七年,他还没有接近政党以前,党中一班无知妄人,把他骂得一文不值,那时我曾为他大抱不平。后来他接近了政党,同是那一班无知妄人,忽然把他抬到三十三层天以上,仿佛鲁迅先生从前是个狗,后来是个神。我却以为真实的鲁迅并不是神,也不是狗,而是个人,有文学天才的人。

最后,有几个诚实的人,告诉我一点关于鲁迅先生大约可信的消息:鲁迅对于他所接近的政党之联合战线政策,并不根本反对,他所反对的乃是对于土豪、劣绅、政客、奸商都一概联合,以此怀恨而终。在现时全国军人血战中,竟有了上海的商人接济敌人以食粮和秘密推销大批日货来认购救国公债的怪现象,由此看来,鲁迅先生的意见,未必全无理由吧!在这一点,这位老文学家终于还保持着一点独立思想的精神,不肯轻于随声附和,是值得我们钦佩的。”

22) 本論初出は胡風主編《七月》半月刊第2集第4期(漢口,1938年3月)。ここでは『毛沢東集』第2版第5巻(蒼蒼社,1983年刊)による。1980年代以降の毛沢東の公刊テキストでは、「ト

ロツキー派は漢奸となり……」の一文は削除されている。たとえば、《六十年来鲁迅研究论文选》（中国社会科学出版社，1982年），《人民日报》CD-ROM版（五十年图文数据系列光盘，北京人民日报出版社版），さらに《毛泽东文集》第2卷（人民出版社，1993年），《毛泽东文艺论集》（中央文献出版社，2002年）など参照。

- 23) 周海婴著《鲁迅与我七十年》（南海出版社，2001年）371頁。本書についてはいろいろ疑義が提出され，この毛沢東の言葉の信憑性についても議論があったが，毛沢東発言の現場に居合わせた黄宗英の証言が出て，少なくとも毛沢東の発言そのものを否定することはできなくなっている。ただ，この発言の評価については見方が分かれるところだ。以下の書，論文などが参考となる。陳明遠編《假如鲁迅活着》（文匯出版社，2003年），丸山昇著「最近の魯迅論議から考える」上下（『季刊中国』第75号～第76号，2003年冬号，2004年春号），同著「もし魯迅が生きていたら——魯迅と毛沢東——」（東京大学中文科同窓会会誌「公孫樹人」第3号，2004年5月），代田智明著「ロシナンテの影——『もし魯迅がいま生きていたら』論争ノート」（『中国研究月報』2004年8月号）等。この問題については筆者もいずれ稿を改めて論じたいと考えている。

- 24) 陳漱渝編《魯迅風波》（大衆文芸出版社，2001年）及び，同書所収の編者「前言」等参照。

付記) カッコ，引用符について，本稿では基本的に日本語文献については日本式を，中国語文献については中国語式を用いた。

付録資料：《魯迅全集》に現れる陳独秀（編名，所収作品集名，本文，執筆日時《魯迅全集》の巻・頁を記す。⑩～⑫は，同全集当該巻参照）

- ① 《我之节烈观》，《坟》所收
“第一个是康有为，指手画脚的说‘虚君共和’才好，陈独秀便斥他不兴；”（第1卷 p.116）
1918.7
- ② 《阿Q正传》第一章《序》，《呐喊》所收
“因为陈独秀办了《新青年》提倡洋字，所以国粹沦亡，无可查考了。”（第1卷 p.489）1921.12.
頃
- ③ 《<呐喊>自序》，《呐喊》所收。
“至于我的喊声是勇猛或是悲哀，是可憎或是可笑，那倒是不暇顾及的；但既然是呐喊，则当然须听将令的了，所以我往往不恤用了曲笔，在《药》的瑜儿的坟上平空添上一个花环，在《明天》里也不叙单四嫂子竟没有做到看见儿子的梦，因为那时的主将是不主张消极的。”（第1卷 p.419）
1922.12.3
- ④ 《答有恒先生》，《而已集》所收
“曾经有一位青年，想以独秀办《新青年》，而我在那里做过文章这一件事，来证成我是共产党。但即被别一位青年推翻了，他知道那时连独秀也还未讲共产。”（第3卷 p.456）1927.9.4
- ⑤ 《扣丝杂感》，《而已集》所收
“因为共产派无视一切旧物，而白话则始于《新青年》，而《新青年》乃独秀所办。”（第3卷 p.485）
1927.9.15
- ⑥ 《<自选集>自序》，《南腔北调集》所收
“这些也可以说，是‘遵命文学’。不过我所遵奉的，是那时革命的前驱者的命令，也是我自己所

- 愿意遵奉的命令，决不是皇上的圣旨，也不是金元和真的指挥刀。”（第4卷p.456）1932.12.14
- ⑦ 《我怎么做起小说来》，《南腔北调集》所收
“但是《新青年》的编辑者，却一回一回的来催，催几回，我就做一篇，这里我必得纪念陈独秀先生，他是催促我做小说最着力的一个。”（第4卷p.512）1933.3.5
- ⑧ 《〈守常全集〉题记》，《南腔北调集》所收
“我最初看见守常先生的时候，是在独秀先生邀去商量怎样进行《新青年》的集会上，这样就算认识了。”（第4卷p.523）1933.5.29
- ⑨ 《忆刘半农君》，《且介亭杂文》所收
“他到北京，恐怕是在《新青年》投稿之后，由蔡子民先生或陈独秀先生去请来的，到了之后，当然更是《新青年》里的一个战士。”（中略）
“《新青年》每出一期，就开一次编辑会，商定下一期的稿件。其时最惹我注意的是陈独秀和胡适之。假如将韬略比作一间仓库罢，独秀先生的是外面竖一面大旗，大书道：‘内皆武器，来者小心！’但那门却开着的，里面有几枝枪，几把刀，一目了然，用不着提防。适之先生的是紧紧的关着门，门上粘一条小纸条道：‘内无武器，请忽疑虑’。这自然可以是真的，但有些人——至少是我这样的人——有时总不免要侧着头想一想。半农却是令人不觉其有‘武库’的一个人，所以我佩服陈胡，却亲近半农。”（第6卷 pp.71—72）1934.8.1
- ⑩ 书信 1918.1.4 致许寿裳 “《新青年》以不能广行，书肆拟中止；独秀辈与之交涉，已允续刊……。”
- ⑪ 书信 1921.1.3 致胡适 “寄给独秀的信，启孟以为照第二个办法最好，……。”
- ⑫ 书信 1921.8.25 致周作人 “惟独秀随感究竟爽快耳。”
- ⑬ 书信 1931.3.3 致山上正义
“9（羅馬字の使用を主張したのは錢玄同である、ここに陳獨秀と云うのは茂才公の誤なり）”（第13卷p.458）
- ⑭ 日记 1920.8.7 “上午寄陈仲甫说一篇。”
- ⑮ 日记 1920.11.9 “寄仲甫说一篇。”
- ⑯ 日记 1921.5.18 “得仲甫信。”
- ⑰ 日记 1921.7.2 “寄仲甫信并文稿一篇，由李季收转。”
- ⑱ 日记 1921.8.30 “下午寄陈仲甫信……。”
- ⑲ 日记 1921.9.10 “寄陈仲甫稿二篇，……。”
- ⑳ 日记 1921.9.25 “得陈仲甫信。”
- ㉑ 日记 1921.9.26 “寄陈仲甫信……。”